

イタリア国立ヴェネツィア“カ・フォスカリ”大学訪問報告

鳥越輝昭

訪問先：Università “Ca’ Foscari” di Venezia (国立ヴェネツィア“カ・フォスカリ”大学) Facoltà Lingue e Letterature Straniere-Dipartimento di Studi sull’ Asia Orientale (外国語外国文学部，東アジア研究学科)

訪問日程：2007年3月26日，3月27日

訪問者：鳥越輝昭

イタリア国立ヴェネツィア“カ・フォスカリ”大学で日本学・日本語を研究教授しているのは，外国語外国文学部の東アジア研究学科である。同学科は日本学・日本語専攻と中国学・中国語専攻の2専攻を持つ学科（ただし，イタリアの大学の通例で大学院教育もおこなう）である。イタリアの大学は一般にキャンパスを持たず，学部もしくは学科ごとに市内の建物に分散していることが多いが，ヴェネツィア大学の場合もそうで，現在，東アジア研究学科はヴェネツィア本島にあるヴェンドラミン・デイ・カルミニという名の館に居を置いている。これは，15世紀に建てられた4階建ての，元は貴族の館で，フランスの作家アンリ・ド・レニエが短期間住んだこともある。外観は簡素だが，内装は華麗さを残している。館は，狭い運河を挟んでカルミニ教会と対峙している。このあたりは観光客はめったに訪れることのない，研究と勉学に好適な静かな場所である。

ヴェネツィア大学は，19世紀後半（1868年）に，経済学・商業学を教授する王立高等商業学校として創立された。これはイタリアで最初の高等商業で，創立の目的は実業人の養成，および中等教育の「経済」担当の教員養成であった。「カ・フォスカリ」の名は，この学校が，かつてこの町の元首を出したフォスカリ家の館に置かれたことに由来している。この高等商業はその後発展を遂げ，現在は4学部，19学科を持つ総合大学となり，18,000名の学生が学んでいる。ヴェネツィア大学では創立時から外国語教育に力が注がれ，現在では40カ国語が教授されているのも特色である。

日本語は，創立まもない1873年から教授され，初代講師は吉田要作（元在日イタリア領事館通訳），二代目が緒方惟直（蘭学者緒方洪庵の子息，画家）であった。現在，東アジア研究学科の日本学・日本語専攻は，イタリアでもっとも充実したスタッフを擁し，イタリア人専任教員8名，任期制教員3名，日本人ネイティブ教員が7名である。イタリア人専任は，G・カルツァ（日本美術史），F・ガッティ（日本史，日本現代史），M・ラヴェリ（日本哲学史・宗教史），B・ルベルティ（日本演劇，近世演劇，近世文学），L・ビエナーティ（日本現代文学），R・カーロリ（日本史，沖縄史），M・R・ノヴィエツリ（日本近現代文学，日本映画），A・トッリーニ（古文，国語史，仏教史），L・モレッティ（近世文学）の諸先生，任期制教員がV・アルベリッツィ，M・デルベーネ，三宅の各先生，日本人ネイティブ教員は，河野，中山，仙北谷，鈴木，上田，植村，安田の諸先生である。日本語・日本文化を全体的にカバーしているのが特徴である。

東アジア学科の研究紀要として *Asiatica Veneziana*，外国語外国文学部の研究紀要として *Annali di Ca’ Foscari* が毎年刊行されている。また，東アジア学科を拠点として国際学会，国内学会，講演会なども多数開催されている。たとえば2006年には，イタリア日本語教育学会と沖縄研究国際学会が開催されているほか，小山聡子氏など日本人学者を招いての講演，神田山陽氏の講談，大阪文楽座による浄

瑠璃などが上演され、日本文化の紹介に意が注がれている。

学科図書館は、ヴェンドラミン館の各階にわたるもので、総開架制、日本関係書籍は1万1千冊、そのうち半数が日本語による出版物である。また97種の定期刊行物を所蔵している。蔵書は分野・時代ともにバランスの良いものである。文学については、古典から近現代まで、叢書、個人全集をふくめて集書されているし、歴史についても、古代から現代まで、政治・宗教・文化にわたって集書されている。演劇関係書籍、日本ファシズム関係書目、英語で書かれた日本関係書籍の充実しているのが興味深い。

現在東アジア学科では、全体で800名ほどの学生が日本語・日本文化を専攻している。1年生（現在200名ほど）は、週12時間の日本語の授業（イタリア人による授業8時間、日本人ネイティブによる授業4時間）に加えて、イタリア語で講義される日本史、日本哲学宗教史、日本文学、日本美術史の授業がある。2年次からは、古文の授業、および、日本語以外のアジアの言語の授業が加わる。中国語、韓国語を選択する学生が多いとのことである。3年修了コース（学士課程）を終えた学生のうち専修コースへの進学率は20%ほどだそうである。日本の大学では、東京外国語大学、早稲田大学、慶応大学と大学間交流協定がある。また、3年次後期（4月～6月）に、希望者は文化外国語専門学校、九州共立女子大学などへ日本語研修に出かけて単位が認定される制度がある。毎年40名ほどがこの制度を利用するとのことである。卒業後は日本企業、通訳、翻訳などに職を得る場合が多いようである。

わたくしは、3月27日には、東アジア学科日本文化専攻のボナヴェントゥーラ・ルベルティ教授（専攻主任）、アルド・トッリーニ教授（国際交流担当）にお目にかかり、お話を伺うとともに、多数の資料をいただいた。ここに記すのは概略のみである。また、その前日には、図書館を、カウンターでアルバイトをしている日本文化専攻の学生ヴィオットさんに案内していただいた。まだ2年生だそうだが、書棚に加藤周一『日本文学史序説』と小西甚一『日本文藝史』の伊訳があったので、尋ねてみると、どちらもすでに読んだとのことだった。勉強家らしい。